

「せとうち島塾」開講

—島の資源を活かした企業研修

本州四国連絡高速道路株式会社

森 毅彦

■「せとうち島塾」の概要

本州四国連絡高速道路株式会社は、本州と四国を三ルートで結ぶ高速道路会社で、瀬戸内地域の持続的な発展を支え、SDGs達成に貢献していくことを目指している。

昨春策定した中期計画でも「瀬戸内の未来への挑戦」の柱のひとつとして、瀬戸内地域の「島旅の活性化」に取り組むことをあげ、昨年、その一環とし

て香川県丸亀市の讃岐広島（以下、広島）で「せとうち島塾」を三期にわたり開講した。

広島は、大坂城や丸亀城の石垣に用いられてきた良質の「青木石」を産出し、採石業を主産業としてきた。昭和三五年に二千人以上いた人口も令和二年には一七〇人と激減、高齢化率も八〇パーセントを超えている。小中学校は休校中、診療所一軒、飲食店や売店はない。島の玄関口である江の浦港へ

は、丸亀港発の旅客船（一日八便）でわずか二〇分の距離にある。塩飽諸島最高峰（三二二メートル）の王頭山や心経山を縦走するハイキングコースや、島を周回する道路沿いに人生訓を入れて「いろは」順に設置された計四四基の巨大な石碑を廻る「いろは石めぐり」などが島の名物となっている。

「せとうち島塾」は、当社の若手社員を対象に五月（第一期）と一〇月（第二期）に各二日間実施した。島の現状や課題などに関する座学とともに、ビーチコーミング（海岸ごみ収集）やタイドプールチャレンジ（生態系調査）、クリーヌウォーク（のこぎりや鎌などでハイキングコースなどを清掃・整備）、イノシシを捕獲するくくり罠の見学体験を行なうとともに、島の方々との交流・意見交換の機会を設けた。

参加者の反応は期待以上で、「交通問題など島で生活する上での課題を考えるきっかけになった」「島や四国が抱え



ハイキングコースを整備するクリーンウォークの様子。

る人口減少などの問題を解決することが当社の使命と再認識した」などの感想が寄せられた。

十一月（第三期）には、企業研修とし

ての可能性を追求するため、四国運輸局長や中四国農政局の部長を講師に招き、第一・二期と同様のプログラムを企業のトップや役員、NPOやDMO、

国の機関（地方運輸局や地方農政局）の方々を対象に開催した。事後アンケートでは、多くの参加者から最高評価を得た。マイクロプラスチック問題や生態系の変化に触れたことで、SDGsの観点からも学びにつながった点などが高く評価されたようである。

■地元と連携したプログラム

「せとうち島塾」が成功した背景として、地

元住民と行政の協力が得られた点が大きい。広島を受け入れ団体がしっかりしており、毎期、開講から閉講まで五人の島の方にインストラクターとして参画していただいた。いずれも七〇歳前後の男性で、島の活性化に取り組むNPOの代表や地区の自治会長などを務めておられるが、イノシシ猟の第一人者であったり、竹細工や十数種類の柑橘類の栽培を手がけていたり、ラジオ体操の会の会長を務めていたり、多芸多趣味の生活を謳歌されている。さらに、島の先行きを憂いて古民家改装や登山ガイドなどにも取り組まれている精力的な方々である。

当社は、令和元年から島旅の活性化に係る研究をしており、この五人には同三年に広島でモニターツアーを実施した時からお手伝いいただいている。そのご縁もあり、私は彼らを勝手に「アングル・ファイブ」と呼称している。昼間は活動的、お酒が入ると憂国の志士

のごとく島の現状・未来を嘆いて単刀直入に腹を割って話をしてくれるのが魅力である。思わずこちら身が入り、議論は沸騰するのだが、そうしたやりとりを通して「せとうち島塾」にも協力いただけることになった。

アンクル・ファイブには食事や意見交換などにも同席いただいた。参加者は、慣れない方言や癖のあるしゃべり方に戸惑いつつも、彼らの口から語られる実情や、彼らの人柄に触れることで、島に対する興味や愛着が湧いたようである。五人の存在なくして事業の成功・継続はあり得ない。

行政の協力も欠かせなかった。毎期、座学の初回講義は丸亀市の方をお願いしており、特に讃岐広島コミュニティセンター所長には講師のみならず、会場の提供、交流・意見交換への参画、島の方々との調整などさまざまな面で世話になった。

■事業継続に向けた課題

本事業の実施にあたりボトルネックの一つとなっているのが宿泊の確保である。島にも若干の宿泊施設はあるが、部屋数が限られ、食事付きでない泊まりにくい宿もある。そのため、これまでの事業では、全員が一八時過ぎの最終便で丸亀港に戻り、市街地に宿泊翌朝再訪してプログラムに参加する形をとったが、せっかくなので島に流れる時間と空間をできるだけ堪能していただきたかった。

また、島にはわずかに自販機があるのみで、食料品や日用品を買う場所がないため、必要な飲料などは持参していただくか、主催者側で用意した。昼食時のお弁当やBBQの具材なども市内で調達して持ち込んだ。島にお金落ちる仕組みがあれば、継続的な活性化に結びつくように思う。トイレの確保も課題で、活動はときに二時間以上

にわたり、不自由したこともある。

また、島には医療施設が一カ所のみである。スタッフは事前に包帯の巻き方などの応急措置を看護師から教えてもらった上で、救急箱を持参した。幸いなことにこれまで問題は発生していないが、今後の課題として残っている。ただし、これらは都会生活を送るわれわれの日常では当たり前のごとく存在、機能していることであり、それがない島での研修で、気づくことや感ずること、考えることもある。何から何まで揃っているところでの開講を慫慂するつもりはない。既存の集会所・公民館や修繕が追いついていない公衆トイレの有効活用や機能発揮・維持が重要であろう。

事業の実施主体についても課題がある。「せとうち島塾」は、当社が島の方々と意見交換を重ねる中でうかがった「島外の方々との交流を期待する」「ハイキングコースの整備など手間暇



イノシシのくくり罠見学体験。

かかる作業を地元住民だけで継続するのは困難になってきている」といった声を踏まえ、実現したものである。継続していく上で、実施主体には行政と

の関わりが欠かせないと思われる。最大の課題は、こうした事業を続けていくための大前提となる収益性である。現行では、収益性の観点から民間

ベースで実施・継続していくことは難しい。第一・二期は社内研修の一環だが、第三期は社外の方々に試行プログラムとして食事などの経費のみ集める形で開催した。相応の経費をいただく有料プログラムとした場合、どの程度参加していただけたか分からない。ただ、第三期に参加した旅行会社の方から、プログラムの多様化など改善点はあるものの「企業向け研修として有料化できる」と評価いただ

き、可能性を追求していきたいと考えている。

参加者からは「島の地理的特性や歴史的背景については事前に勉強して訪れたかった」「参加者のニーズに沿って多様化を図るとなおよい」などの意見もあった。こうした声も踏まえ、配布資料の充実、体験メニューや座学の充実・多様化は重要な検討課題であると認識している。特に参加者が目の当たりにする島の現状が、SDGsとどのように関連しているのかを考えるきっかけとなるようなプログラム構成を心がけていきたい。

■行政に求めたい さらなる協力と関与

施設・実施主体・収益などの課題に対応していく上で大きな役割を期待されるのが地元行政である。特に次の三点について協力・関与があるとありが



たい。

一点目はコーディネート役である。これまでは当社が主催者として、行政・住民・参加者・講師などの調整を行ってきたが、一般的に一企業がこれらを担うのには限界がある。

二点目は住民とのつなぎ役である。

現在はアンクル・ファイブにご協力いただいているが、住民に理解を求め、参画を促していく上で、行政の役割は欠かせないと思う。

最後は、地域に存する施設の有効活用である。旧広島小学校のコミュニティセンターは、防災時の避難場所としてシャワーも備えており、寝具を持ち込めば宿泊できると考えられる。また、期間限定で芸術系の学生に貸し出している施設もあり、それらを「せとうち島塾」の参加者にも活用させていただけとありがたい（現在は、本事業に貸し出すことが目的外使用にあたってしまったため、残念ながら活用できていない）。

これら課題はあるものの、「せとうち島塾」を始動し、三期にわたる開講を通して、本事業の意義が確認できた。本年も四月の当社の新人研修としての第四期を皮切りに、アンクル・ファイブや行政の協力を得ながら「せとうち島塾」を継続していくこととしている。

また、広島モデルを他の瀬戸内の島々で展開することも検討していきたい。その際、他の企業や主体をいかに巻き込み、連携していけるか、当社がどのような役割を担っていくべきかも考えていきたい。このような取り組みが拡がっていくことで、瀬戸内の島々における交流・関係人口の増加や地域の活性化につながっていくけば本望である。

森 毅彦（もり たけひこ）

本州四国連絡高速道路株式会社取締役常務執行役員。東京大学法学部卒業後、建設省（現国土交通省）採用。国土交通省参事官（グローバル戦略）等を経て令和3年6月より現職。